

横浜における近代化遺産の保存と活用に関する 調査報告

堀野正人・戸田清子・岡本 健

はじめに——調査の背景と目的

都市文化commonsでは、2013年度COC事業の助成を受けて、横浜における近代化遺産の保存と活用に関する調査を実施した。調査の時期は2014年2月18～2月20日である。主要な調査地は、BankART Studio NYKの他、関内地区の文化施設、みなとみらい21地区の近代化遺産、山手洋館、元町商店街などである。参加教員は、堀野正人、戸田清子、岡本健の3名であった。

今回の調査では、都市文化commonsにおける研究・教育の三つの柱である都市社会史、メディア・表象、アート・アミューズメントの視点から参考となる都市として横浜を取り上げた。横浜は、近代の文化形成史において特異な位置を占め、現在ではそれらの遺産を活かした文化・産業政策の進展が注目を集めている。調査の主な目的は、①近代化遺産の保存と活用が横浜市の施策のなかでどのような経緯によってなされてきたのか、②なかでも、近代化遺産を文化芸術の活動拠点として再生活用した事例であるBankART1929の取り組みの実際について明らかにすることである。

BankART 1929の事業については、運営を担っているNPO法人BankART 1929の池田修代表に聞き取りをさせていただく機会を得た。以下では、事前に入手した文献や、同氏からご提供いただいた資料と聞き取り内容をもとに述べていくことにする。

横浜市の文化芸術を活かした都市活性化政策

横浜市は、国指定重要文化財の保存について、戦後の文化財保護法のもとで教育委員会所管の文化財行政として実施していたが、その対象となる建造物の時代や種類は限られていた。その後、「歴史を生かしたまちづくり」が着手され（1988年に同要綱が制定される）、関東大震災以降の近代建築や西洋館も街並みデザインの視点から対象として取り込み、保存活用することが可能になった。その結果、旧英国領事館（1931造）の買収と開港資料館としての活用（1979）や、エリスマン邸（1926造）の移築復元（1990）など、関内・山手の旧市街地に残されていた一部の歴史的建造物の保存活用が進められるようになった¹⁾。

1990年代に入ると、みなとみらい21地区において商業施設や文化・アミューズメント施設の集積が急速に高まっていった。その一方で、関内地区などの旧市街地では歴史的建築物が減少し、良好な景観が失われるとともに、オフィスの空室率が上昇し、活力が失われつつあった。こうした状況のもとで、横浜の文化・歴史の資源を最大限に活用すべきだという意識が高まってきた。

2002年に、文化芸術と観光振興による都心部活性化検討委員会が発足し、中心市街地の活性化のためには何をなすべきかが議論され、2004年1月に「文化芸術都市——クリエイティブシティ形成に向けた提言」が出された。提言では、「文化芸術は、市民生活に貢献するばかりでなく、都市の活性化（集客・観光・新産業）、そして横浜市の国際的な競争力にとっても効果が大きいものであり、今後の横浜市の重要な政策になる」という基本認識のもと、「文化芸術創造都市」（Creative City YOKOHAMA）の構想が示された。

また、文化芸術を中心としたまちづくりを推進するための計画として、①アーティスト・クリエイターが住みたくなる創造環境の実現、②創造的産業クラスターの形成による経済活性化、③魅力ある地域資源の活用、④市民が主導する文化芸術創造都市づくり、という4つの基本的方向が明らかにされた。さらに、重点的に取り組む3つの戦略的プロジェクトとして、①クリエイティブ・コア構想（創造界隈形成）、②映像文化都市、③（仮称）ナシヨナ

ルアートパークが掲げられた²⁾。

2010年1月には、クリエイティブシティ実現に向けた6年間の取り組みを踏まえて、創造都市横浜推進協議会が「クリエイティブシティ・ヨコハマの新たな展開に向けて～2010年からの方向性～」を発表した。そこでは、文化芸術・まちづくり・創造的産業の三位一体による都心部復権という基本的な指針を引き継ぎつつ、横浜の多面的な魅力を世界へ発信し、交流を活性化すること、より多くの市民が創造性を発揮できるまちの仕組みを作ることが目標として明示された³⁾。このような大きな流れのなかでBankART1929の活動がはじまり、展開をみることになる。

創造界隈の形成とBankART1929プロジェクト

先に述べたように、文化芸術都市——クリエイティブシティ形成のための戦略プロジェクトの一つが、「創造界隈の形成」である。具体的には、馬車道、日本大通り、桜木町・野毛地区を中心に、歴史的建造物や倉庫、空きオフィスなどを創造活動の場に転用し、アーティストやクリエイターが、創作・発表・滞在（居住）する創造界隈の形成が推進されてきた。

最初の事業は馬車道周辺からはじまった。このあたりは開港場として発展し、歴史的建造物も多く、横浜らしい雰囲気を保っていた地区である。しかし、横浜駅周辺やみなとみらい21地区の発展により経済的なポテンシャルが低下していた。そこで、この地区の活性化のため、旧第一銀行と旧富士銀行の建築をリノベーションして、文化芸術の拠点として利用することで再生を図る「都心部における歴史的建築物等の文化・芸術活用実験事業」(BankART1929⁴⁾プロジェクト)が実施された。同事業は、都市計画局の都心部整備課と都市デザイン室の管轄のもとで、2004年2月からはじまり2006年3月までの約2年間で終了したが、さまざまな個別事業の展開とその評価をふまえ、2006年度より「都心部歴史的建造物等活用事業」として本格的に継続されることになる。

歴史的建造物の「旧第一銀行 (BankART1929yokohama)」「旧富士銀行 (BankART1929馬車道)」の事業運営は公募によるものとされ、応募24団

調査報告

体のなかから、STスポット横浜（代表：曾田修司氏）とYCCCプロジェクト（代表：池田修氏）の2団体が選ばれた⁵⁾。この2団体が共同で運営管理団BankART1929を結成して運営を担っていたが、その後、2007年にNPO法人BankART1929を設立し、創造界限形成における重要な役割を果たしていくことになる。なお、この間に旧富士銀行に東京藝術大学大学院が進出することになり、2005年4月に映像研究科が開校した。このため、BankART1929は海岸通りの日本郵船倉庫（BankART Studio NYK）に活動拠点を移している。BankART Studio NYKは、海に面する3階建ての倉庫をリノベーションしたものである（使用床面積は約1600㎡）。近代における産業化の“記憶”を残す歴史的建造物であり、岸壁に立地した開放的な環境が、この施設の特徴となっている。BankART1929は、港固有のウォーターフロントという市民の共有財産を活かし、イベントがなくても建物や風景を見にくる人びとに対して広く開いていくことを目指してきた。



BankART Studio NYK 外観
(堀野撮影)

このBankART 事業を契機に、横浜市は、2006年度から創造界限形成に向けて3つのモデル地区を中心に本格的に事業を開始する。すなわち、①旧大蔵省関東財務局事務所をアートスタジオとして活用するプロジェクト「ZAIM」（老朽化のため2010年3月閉館）、②市の結婚式場であった旧老松会館を活用した「急な坂スタジオ」、③違法な小規模飲食店の建ち並ぶ黄金町地区の活動拠点「BankART 桜荘」の整備・運用が着手された。

また、民間の力による創造界限形成も進んでいった。市街地に残っている万国橋倉庫（1969造）を約3億円かけて民間企業がコンバージョンし、そこにデザイン・アニメーション・ファッション・建築デザイン会社等を集積させていった。隣接の北仲地区では、旧帝蚕倉庫の二つのビルを「北仲BRICK」と「北仲WHITE」として再開発までの間、低料金で賃貸してもらい、アーティスト用スタジオとして入居者を募集した。その結果、2005年5月から18ヵ月間で、50組余りが入居した（現在は、「宇徳ビルヨンカイ」に移転）。

NPO 法人 BankART1929 の事業内容

ここではBankART1929の事業内容について、前出の国吉直行・仲原正治・池田修（2006）⁶⁾と、NPO 法人BankART1929代表の池田修氏からの聞き取りをもとに概略を述べることにする。

(1) 運営方法

NPO 法人BankART1929は、旧第一銀行を改修・再現したBankART1929 Yokohamaと日本郵船の倉庫を改修したBankART Stuido NYKの二棟を横浜市からの無償貸与（光熱水費含む）を受けて運営してきた（現在、BankART1929 Yokohamaは運営していない）。実験事業当時では、設備、清掃、警備、人件費を含む管理業務の費用として横浜市から支給された補助金が約6,500万円あった。この他に、BankART 独自の収益事業による収入がほぼ同額あり、両者の合算で運営されていた。スタッフは常勤が10人と定期アルバイトが10人程度で、事務・企画系の区別はない。その後、市からの補助金が毎年カットされるのにもない、自己収益を上げるため、ベース事業を延ばしていく経営努力をすることや、館外でのコーディネート事業などに力を入れた。その結果、現時点での収入は、横浜市からの補助が5,000万円程度で、独自の収益事業が約9,000万円となっている。

運営方法におけるひとつの特徴は、公設民営の新しい可能性を探ってきたことである。基本的なスタンスとして、公設であるため、広く市民を受け入れることを積極的に行っている。一方、民営であるために先駆的な活動を強く推進していくことも可能である。たとえば、「横浜トリエンナーレ2005」と連動し、BankART 全館を50日間、24時間開放するという実験的な試みを行っている。BankART1929は「徹底的に開く」こと、すなわち、どうしたらこの施設が親しまれ、機能していくのかを探ってきたのである。

また、横浜市との関係では、運営団体の行う活動を評価しアドバイスするために有識人から構成される推進委員会の存在が大きい。事業の当初は、委員会が月に一度ほどのペースで開催され、委員、横浜市、BankART の三位が独立した立場で構成する緊密な会議が継続されてきた。それによって運営

調査報告

団体にも評価する側にも緊張感が生まれ、運営を支える行政とも随時、意思疎通がはかられてきた。

(2) 事業の構成

BankART1929ではアートイベントの企画・運営事業をはじめ、様々な取り組みを行っている。主な事業には以下のようなものがある。

① アーティストインスタジオ

BankART StuidoNYKには20～80㎡のスタジオが9つあり、2か月単位でアーティストに制作スペースとして低廉で貸し出している。アーティストインスタジオ事業は街にアーティストを招き、ともに育ち、発信していく意味もあるので、ウェルカムパーティーを開いたり、一般公開を活発に行っている。いくつかの宿泊スペースが確保できたので、レジデンスプログラムも実施している。

② 主催事業

基本的な考えはシンプルで、横浜の持っている財産をリレーし、よりコンテンポラリーに展開することである。歴史的建造物、街、食、写真、大野一雄(舞踏)他、これらの既存のポテンシャルをどのように引き出すか、展開できるかをテーマにしてきた。

③ コーディネート事業

BankARTの最大の特徴をあらわす事業で、BankART が関わることで、イベントそのものが向上するよう後押しをしている。スペースレンタル事業でも、プレスを手伝ったり、チラシ作成のアドバイスを行ったり、収支が合っていない無理な事業に対してはコメントをしている。またオファーの段階で内容がよければ、予算提供、企画協力をする。年間オファーは1,000本ぐらいで、そのうち約3分の1が実現している。

なお、池田氏によれば、これまでにアーティストの桑田啓祐やゆず、漫画「北斗の拳」などに関する事業企画が打診されたこともあったが、BankARTの理念にはなじまず、有名になるだけでは意味がないという考えから断ったという。

④ BankART ショップ

アート関係の本やスクール講師、企画展作家、関係者の著作などの芸術書籍を扱う本屋である。店員は受付が兼務し、規模を少しずつ上げて運営してきた。取扱いの商品は3,000アイテムを数える。



BankART ショップ
(堀野撮影)

⑤ BankART パブ&カフェ

年中無休で夜11時まで営業している。イベント開催中はもとより、スタジオアーティストや毎日のスクールのビフォー/アフタートークに、また芸術にはあまりなじみのない一般の人たちへの開口部として、BankART事業全体の交差点的な役割を担う。1杯350円程度で手間のかからないものでメニューを構成している。売り上げは45万/月でスタートしたが、現在は100万/月程度である。



BankART パブ&カフェ
(堀野撮影)

⑥ BankART スクール

講座ではなく、小さいけれど学校であるという考え方で開設された。内容は生涯学習講座と大学院の授業の中間レベルを目指している。2か月で8コマを基本単位に各ジャンルの第一線で活躍する人たちを講師に迎え、20人までの少人数制で月～土曜まで毎日開催している。これまでに、80講座、241名の講師陣(ゲスト含む)、1,000名を越す学生が受講している。生徒同士、先生と生徒との交流を大切にしており、講座終了後も活動や関係を継続しているチームもある。

⑦ その他の事業

コンテンツ事業ではカタログを展覧会期のみ流通するもので終わらせるのではなく、出版事業へと展開させている。また、主催事業活動以外でもおもしろいものがあれば発行を引き受ける。コンテンツ制作の一例として、横浜の地ビール業者と横浜市職員有志等からなる「芸術麦酒プロジェクト」があ

調査報告

る。横浜産の麦と水源地の山梨道志の水を使ったオリジナルビールのネーミング&ラベルデザインコンペを開催し、2種類の発売を行った。

おわりに

横浜市における文化芸術による都市活性化施策であるBankART1929を中心に、その歴史的背景と事業運営の特徴を述べてきた。最後に、この事業の意味ないし位置づけについて、若干のコメントを記しておきたい。

BankART1929や、それに続く横浜の旧都心部における文化芸術振興の事業は、現代における産業のトレンドを意識した事業である。デザイン、映像、音楽、美術などの創造的産業は、今後さらに発展の予想されるソフト産業である。これらの活動は、常に新たな価値を生み出し、経済的活動としても拡張していく可能性が高い。そして、事業のもうひとつの企図として、文化芸術という創造的産業に横浜の個性である港や歴史的建造物を加味することにより、他都市とはまったく異なる横浜らしい個性を生み出すことがある。さらに、こうした活動を通じて市民に創造活動の機会を提供して豊かな生活を実現しようとすることも目指されている。

したがって、まちづくりの柱のひとつに文化芸術を位置づけ、都市の魅力を生み出そうとするものであり、自ずと総合的な視野からのアプローチが必要となる。アーティストの活動支援、歴史的建造物のリノベーション、建築デザイン会社の誘致、イベント開催や市民への情報提供等々、幅広い事業が展開されてきたことは、うえに述べたとおりである。横浜市と連携しつつ事業を推進してきたNPO法人BankART1929は、その中心的な役割を担ってきた。こうした横浜での文化芸術振興による都市活性化の取り組みは、事業の多様性や規模、運営手法の独自性など、日本の他の都市ではみられない先進的なものといつてよいだろう。ちなみに、横浜市は、この事業を中心とする実績を評価され、2007年度に「文化庁長官表彰文化芸術創造都市賞」の第一号を受賞している⁷⁾。

むろん、横浜の事業に課題がないわけではない。たとえば、「文化芸術都市——クリエイティブシティ形成に向けた提言」で掲げられた「市民が主導

する文化芸術創造都市づくり」という基本的方向ないし目標からすれば、まだまだ市民の間にこうした活動や事業が浸透しているとは言えないだろう。また、当初は市行政が主導して、資金をはじめ様々な助成のもとで、これらの事業が展開されてきたのであり、これをボトムアップ型の民間主導のものへと本格的に転換していくことも今後の大きな課題となっている。

池田修氏からの聞き取りでは、いくつもの貴重な示唆を得ることができたが、そのなかでも印象に残る次の二点を挙げておきたい。

ひとつは、運営団体である BankART1929 と横浜市との関係についてである。当初から両者の関係は密接なものであり、この事業の特徴にもなっていた。しかしながら、行政の人事システムの常で、一定期間で市職員が異動してしまうことで、事業の継続性に支障が出るという問題があった。特に、市長の交代の際には、担当部署の市職員の構成は一変してしまった。池田氏も、当初はこれを問題としてのみ認識していたのだが、ある意味では、異動することもマイナスばかりではないと言う。というのは、異動があることで、より多くの市職員を文化芸術事業の理解者として、あるいはアートのファンとして増やせる可能性があるからだ。実際、文化芸術振興の仕事を離れてからも、BankART1929 との個人的な縁は途切れずに、市行政の内部でも間接的に支援をしてくれる職員が少なからず存在するという。このことは、単純な組織運営論では捉えることのできない、個別具体的な人的関係の役割の大きさを示唆しており興味深い。

もうひとつは、文化芸術の事業の成果が出るまでには時間がかかるという問題である。公的資金を投入し、市所有の施設を利用した事業である限り、その成果とそれを担う組織に対する外部からの客観的な評価が必要であることは確かである。しかしながら、委託される期間は3年と短く、現実にはその間の評価が行われるしかない。池田氏は、時系列のある断面を数量的に捉える評価を認めつつも、それでは測れない長期の、あるいは質的な評価軸をもつ必要があることを強調されていた。たとえば、一人のアーティストが横浜での活動を経て大きな飛躍を遂げ、国際的な評価を受けるようになったとき、事業全体の評価も変わってくる。その意味では、将来の時点でしか事業

調査報告

の本当の価値は見定めることができないのである。こうした芸術活動特有の性格は、組織運営の根本的な理念にさえ影響を与えるものかもしれない。

今回の調査では、BankARTが関与している建造物以外にも、近代化遺産の保存活用の事例を視察することができた。また、新聞博物館と放送ライブラリーという2つの文化施設を見学し、それぞれのコンセプトや展示手法を比較することができた。これらのリノベーションの事例や都市的文化施設に関する時代的背景や社会的役割などの検証は、都市文化コモンズの研究テーマのなかに位置づけられるものであり、今後も引き続き取り組んでいくつもりである。

NPO法人BankART1929代表の池田修氏には、長時間にわたる聞き取りだけでなく、新港地区の倉庫を改修したハンマーヘッドスタジオをはじめ、関連の各施設をご案内いただき、我われはアート制作の現場の空気を直に感じ取ることができた。貴重なお話と機会を提供して下さったことに、深く感謝の意を記しておきたい



ハンマーヘッドスタジオ内部
(岡本撮影)

[注]

- 1) 国吉直行・仲原正治・池田修(2006)「横浜市の「歴史を生かしたまちづくり」と「創造都市」の新展開、BankART1929」地方自治研究機構『地域政策研究』第37号、pp.35-36
- 2) 文化芸術・観光振興による都心部活性化検討委員会(2004)「文化芸術都市・クリエイティブシティ形成に向けた提言」p.5,10
- 3) 創造都市横浜推進協議会(2010)「クリエイティブシティ・ヨコハマの新たな展開に向けて～2010年からの方向性～」p.3
- 4) このプロジェクトの名称についてふれておくと、BankARTは元銀行だった建物と文化芸術活動を組み合わせた造語であり、1929は旧第一銀行、旧富士銀行がともに竣工された年にちなんでいる(MOMA、ニューヨーク近代美術館が設立された年でもある)。

- 5) ヨコハマ経済新聞 (2004/03/02)、<http://www.hamakei.com/special/1/?id=1>、
最終閲覧日 2014/03/25
- 6) 国吉直行・仲原正治・池田修、前掲、pp.40-42
- 7) 文化庁 (2013) 『文化庁長官表彰 文化芸術創造都市部門 受賞都市』文化庁長
官官房政策課 pp.2-3